

聖書:士師記6章25～32節

説教:主の祭壇を築く

はじめに

イスラエルがバアルの神々を拝み、主の目に悪であることを行った結果、主はミディアン人を用いてイスラエルが苦しむことをゆるします。とうとう苦しみに耐えかねたイスラエルが主に叫び求めたとき、主はギデオンを召し出して、ミディアン人の手からイスラエルを救うためにあなたを遣わすことにしたと告げます。最初はとてもそのようなことばを信じる事ができなかったギデオンですが、不思議な神のみわざを見せられたとき、これは主のことばであることを確信しました。それが前回までのあらすじです。

1 バアルの祭壇を壊しなさい

1) 父が持っていた祭壇

自分が主の救いのみわざに召されたことを確信したギデオンに、最初の試練がやって来ます。25、26節です。「その夜、主はギデオンに言われた。『あなたの父の若い雄牛で、七歳の第二の雄牛を取り、あなたの父が持っているバアルの祭壇を壊し、そのそばにあるアシェラ像を切り倒せ。あなたの神、主のために、その磐の頂に石を積んで祭壇を築け。あの第二の雄牛を取り、切り倒したアシェラ像の木で全焼のささげ物を献げよ。』」

ギデオンはそのとおりにします。ただし、それをしたのがだれにも見られないように夜であった。ギデオンの信仰がそのあたりに現れています。

2) なぜ従うのか

次の朝、町の人たちがやってきます。バアルの祭壇もアシェラ像もありません。みな炭になってしまった。その代わりに目に入ってきたのは、主の祭壇といけにえとしてささげられた雄牛でした。別の神ではあるけれど、祭壇があるのだからよい、ではない。彼らはバアルにこだわり、主の祭壇には見向きもしません。すぐに犯人捜しが始まり、ほどなくして犯人はギデオンだということが明らかになります。

ところでどうして神はバアルの祭壇を壊せと言われたのでしょうか。ミディアン人が襲ってくるのは、元をたどればイスラエルがバアルの神々を拝んでいたのが原因です。これからイスラエルを救うときに、問題が起きた最大の原因であるバアル

の祭壇がそのまま残っている。これはどう見ても理屈に合いません。ですからまず最初に祭壇を壊しなさいということは理にかなってはいません。

理屈ではそうですが、しかしこれを実際に行うとなると簡単なことではありません。そもそも、今日のところを読んでおわかりのとおり、召し出されたギデオンの父親がバアル礼拝の中心人物であったことが話を複雑にしています。なぜよりによって父親なのか。おそらくギデオンも相当悩んだだろうと思います。それでも主の命令に従ったのはなぜだろうか。このことを考えていきます。

3) 町の人々から非難を受ける

そこでまず父ヨアシュがこの問題に関してどのような態度をとったのかを詳しく見ておくことにします。こんなとき、日本人の典型的な反応はこうでしょう。町の人々の殺気立った顔つきを見てこれはまずいと思い、とっさに手をつけて「迷惑をおかけして大変申し訳ありません。父であるこの私が責任をもって息子を処罰するので、ここはみなさんお引き取りください。」したことが正しかったのかどうかはではなく、社会に迷惑をかけたかどうかを問題にする。それが日本人の考え方の根底にあります。

2 「バアルのために」の意味

1) バアルをかばって

ではヨアシュはどうだったのか。31節でこう言っています。「あなたがたは、バアルのために争おうというのか。あなたがたは、それを救おうとするのか。バアルのために争う者は、朝までに殺される。もしバアルが神であるなら、自分の祭壇が打ち壊されたのだから、自分で争えばよいのだ。」

息子が大事件を起こしたのにも関わらず、息子のことは何も触れなければ、ひとことも詫びていません。町の人々から「息子を連れて来い」と要求されたのに、そのことについても何も応えていない。では、何を言ったのか。皆さん日本語訳の聖書を読んで意味がすぐにわかったのでしょうか。わかりにくかったのではないですか。というのは、ヨアシュは意識したのかどうか分かりませんが、不思議な言い方をしているからです。まずそのことについて説明します。

「バアルのために争う者は、朝までに殺される。」と言っています。この「タメニ」がポイントです。この「タメニ」は二つの意味が考えられる。一つは、バアルをかばって、バアルの利益のために。もう一つは、バアルに逆らって、バアルに向かって。この二つ。まったく反対の意味になってしまう。これがわかりにくくしている原因です。

もし一つ目の意味のバアルをかばって、という意味であるならどうなるか。これは町の人々のことを指します。日本語訳もそのようにとれるような訳になっています。バアルの祭壇が壊されたと言って騒ぐ者は、バアルの神々によって朝までに殺されるだろう。つまりこれは町の人々へ警告していることになる。

2) バアルに逆らって

「タメニ」の二つ目の意味は、バアルに向かって、バアルに逆らって。こちらの意味ならば、これはだれのことか。バアルの祭壇を壊したギデオンを指す。そうとるならば、朝までに殺されるのは誰のことか。自分の息子ギデオンということになる。

このように「タメニ」と訳されることばはどちらにもとれる。ヨアシュはわざと使ったのではないか。これは私の推測です。

3 主

1) どれが真実の神であるのか

政治家が語る玉虫色の答弁は、それが本当か嘘かだれも証明ができないようになっています。ヨアシュもたんなる責任逃れでこんな言い方をしたのか。実はまったく正反対です。白か黒かはっきり証明できるようになっている。ヨアシュはこう語っている。「バアルのために争う者は、朝までに殺される。」それには一つの条件がついている。「もしバアルが神であるなら。」

先ほど「タメニ」には二つの意味があると言いました。一つ目の意味でとるならこうなる。バアルをかばい、バアルのために争おうとしている町の人々、もしバアルが真実の神であるならば、あなたがたは朝までに殺されるだろう。

二つ目の意味でとるならこうなる。バアルに逆らって、バアルの祭壇を壊す者、それはギデオンのことになるわけですが、もしバアルが真実の神であるならば、朝までにギデオンは殺されるだろう。

さて、結果はどうなったか。町の人々は死んだか。死にません。ギデオンは死んだか。死にませ

ん。それによって何が証明されましたか。バアルは神ではなかった。そのことが明らかになりました。

主がバアルの祭壇を壊すようにと命じたのは、イスラエルが救われていくためにまず異教の神々から離れる必要があった、そのためだったと言えるわけですが、ただそれだけではない。どちらの神が本物であるのかを人々にはっきりと悟らせるためだった。そのために、あえてこのような緊張に満ちた場面を設けたと考えることができます。

2) 預言者ヨナのしるしによって

ギデオンがしたことは、いま見たとおりに自分の父親をも巻き込む大事件に発展してしまいます。もちろんギデオンはこうなることは予想していたでしょう。このことで自分は殺されるかも知れないと覚悟したでしょう。それでもなぜ従うのか。

すぐ思いつく理由は23節。主はこう言われました。「安心せよ。恐れるな、あなたは死なない。」主の御顔を見た者は死ぬと言われていたのに、あなたは死なないと言われた。なので、父親の祭壇を壊しても絶対に自分は殺されない。なにしろ主が守ってくださるのだから。そう考えたのでしょうか。これはいつけん信仰深いように見えても、なにか謙遜さがかけていて傲慢さが見え隠れしているのではないか。そんな気がしてなりません。

もっと別の理由があると考えべきではないのか。彼はイスラエルを救うために自分のすべての人生を投げ打っていきます。それだけではない。自分の家族からも、町の人々からも歓迎されない。すべての人を敵に回すような形での出発になってしまいました。それでもギデオンは主に従おうとします。彼の信仰がすばらしかったのだという一言では済ませられない、よほど大きなことがあったのではないか。

その大きなこととは何か。彼が変えられていった大きな転換点は、22節の告白です。「ああ、神、主よ。私は顔と顔を合わせて主の使いを見てしまいました。」なぜそう思ったのか。主の使いが杖を伸ばして肉と種なしパンに触れたら火が岩から燃え上がって焼き尽くすのを見たから。奇蹟を見たので信じた。でも、ここで思い出したいのはイエスが言われたことです。自分の満足するしるしだけを求めようとする人々に対しマタイ12章39節でこのように言われます。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。」

ギデオンは、見たこともない奇蹟を目の前で見せられたので信じた。もしそうであるなら、イエスが強く非難した律法学者やパリサイ人たちとまったく変わらない。ギデオンが見たのは、律法学者たちが求めた単なる奇蹟ではない。イエスが言われたもう一つのしるし。預言者ヨナのしるし。それを見たのではないか。

なんのために火が岩から燃え上がったのでしょうか。もちろん、疑うギデオンが信じられるようにです。いやもっと言うのなら、イスラエルを救うために主はしるしを与えてくださった。目的はそこにある。主が与えてくださる本当のしるし、預言者ヨナのしるし。罪人を救うために十字架で苦しまれる神のひとり子のわざを火の中に見たからではないのか。もちろん彼はそれで完全に換えられたわけではありません。恐れています。だから祭壇を壊すのも昼ではなくて夜にやった。この後も戦いに出るとき、恐れて、なんども神に確認していく。やっぱりギデオンはこわいのです。それでも神はギデオンを励まして前に進めてくださいます。

3) 築かれた祭壇の前で人が換えられる

そのような神の励ましはギデオンだけに与えられるわけではありません。周りにいる者を変えていく。今日の所で言えば父親のヨアシュです。ヨアシュは、バアルの神々を守らなければならない立場にあったのに、むしろ彼の口を通して真実の神が明らかになっていくような語り方をする。なぜでしょう。ヨアシュは、不思議な奇蹟を見ではありません。ただギデオンが築いた祭壇を見ただけです。それでも、主こそイスラエルを救う神であるとわかった。主の救い、ヨナのしるしが見えた。だからバアルの側にもう立つことはない。主ご自身が、どの神が真の神であるのかを明らかにしてくださいと信じました。

ギデオンは、主の命令に従おうとしたとき孤立無援、ひとりぼっちでした。ところが彼の信仰を通して父親が換えられていく。これこそが主の救いの不思議です。私たちも今このような状況の中で、交わりが断たれ、孤立しているような状態です。自分の小さな信仰が何の役に立つのかと無力さを覚えるかも知れない。けれども、神は小さな信仰を用いて、予想もしなかった大きな働きをしてくださる。そのことを教えられます。

主の救いのみわざの豊かさと深さに感謝するばかりです。